as a substance manifested forth out of both inner and spiritual worlds. I saw and understood the whole nature of good and of evil, their origin and mutual relation, and what constitutes the womb of the genetrix."

アウローラの原文には意味の難解なる個處が尠くないのみならず、文典を無視した文章、綴字の誤れる字、彼特有の用語等があつて、飜譯は譯者自身もいはゝ如く「實に容易ならぬ事業」である。私は今この譯書を原文に對照して見るの餘裕を持たなかつたために、譯者の微細なる苦心に同情し得ないのを遺憾とはするけれども、兎に角かゝる難事業を試みられたことに對して決して感謝の辭を惜しむことはできぬ。私はこの邦譯の成つたのを機會に體驗と思索との溶融せる意味深き書として本書を宗教界並に哲學界に推奬し、譯者の所謂『砂中に金を求める』といふよりはむしろ金中の砂を撰りすてる勞力を喜ぶを分ちたいと思ふ。

本譯書の卷頭には譯者の「ベーメに就て」があつてベーメの傳と彼の神智學體系とが略述され、卷尾には附錄として本文に關する譯者の附註があつて本書を讀む際の參考に供せられて居る。發行所、東京大村書店、定價金四圓。（久松）

三論宗綱要

文學博士　前田慧雲著

本書は學界の泰斗前田博士が曾つて京都本願寺大學林に於て講說されし筆錄である、其の叙述講說の叮嚀なる實に學徒を啓發せれば止まぬ親切さが籠つて居る、特に專門的學究に偏らずして而も亦博士の獨創的卓見が全篇に漲つて居る。

此種の雄篇が陸續と世に出で、學界並に社會を裨益せむことを翹望して止まぬのである。

以下其内容の大要を紹介せんに。

序　篇

講義の方法及組織。歷史の必要。三論玄義の參考書。

本　篇

第一章　三論の沿革

第一節　印度

第二節　支那

第三節　日本

第二章　立宗の綱格

第一節　總論

第二節　二藏三輪

第三節　三時教判

第三章　教理の綱要

第一節　破邪顯正

第一項　破顯大旨

第二項　破顯準則

第三項　所破宗計

第二節　眞俗二諦

第一項　總述

第二項　約教二諦

第三項　約理二諦

第三節　八不中道
第一項　總述
第二項　八不の說明
第三項　中道の說明
第四項　四種釋義
第四節　眞如緣起
第五節　佛身佛土
第四章　三論の解題
中觀論の解題。百論の解題。十二門論の解題。
以　上

和裝美本、二百餘頁、定價金貳圓、東京市丙午出版會社發行（原眞乘識）

華嚴學綱要

齋藤唯信師著

著者は京都帝國大學文學部講師兼眞宗大谷大學の教授で、眞に斯學の巨臂で、其の研究の該博なる其の著書の多數なる學界等に見るの偉人である。本書は著者が先年東洋大學に於て華嚴を講述されし際の講案を基礎として之に訂正修補を加へられしものであつて、其內容の充實せるは推して知るべきである、今一言以つて之を蔽へば、佛內證の大覺の境地の直寫である難透難解の華嚴經の教理をば、最も平易に最も親切に而も徹底的に取經めたもので之に加ふるに華嚴の略史、華嚴の本經、華嚴の教判、華嚴の實踐を以つてし、眞に「華嚴學綱要」の名と實と相伴ふたものである。以下簡單に其の內容を紹介せんに、

第一編　華嚴の略史
第一章　緒言
第二章　印度
第一節　釋迦滅後華嚴の興起。第二節　華嚴經將來の疑一
第三節　華嚴經弘布の概要
第三章　支那
第一節　華嚴の漸興時代。第二節　華嚴の立宗時代。第三節　華嚴の持續時代。第四節　華嚴の衰頽時代
第四章　日本
第一節　講經及造寺。第二節　本末兩寺の傳。第三節　高辨と凝然。第四節　凝然以後の華嚴
第二編　華嚴の本經
第一章　華嚴の部類
第二章　能說の佛身
第三章　說時と說處
第四章　所入の三昧
第五章　本經の說相
第三編　華嚴の教判
第一章　五教十宗の教判
第一節　五教の名義。第二節　五教の所依。第三節　十宗の名義。第四節　十宗の所依
第二章　同別二教の教判
第一節　同別二教の名義。第二節　同別二教の本據